

3 生命を輝かせて

かがや

- (1) かけがえのない自他の生命を尊重して
- (2) 美しいものへの感動と畏敬いけいの念を
- (3) 人間の強さや気高さを信じ生きる

生命いのちを考える

生命いのちを考える 偶然性 今ここにいる不思議



地球の永い永い歴史を考え
人類の誕生を考え
そして今ここにいる自分を考えてみる。
こうやって生きていること
存在していることが
何か不思議に思えてくる。
私の周りに
いつもの笑顔、いつもの声。
でも、この人たちとの出会いも
今、ここに生命を授かっているからこそ。
星の数ほどの偶然があつて
私が、今ここにいることのも不思議。
生きていることの有り難さ。

今、自分がここに生きていることの偶然性。
誰もがいつか必ず死を迎えようという有限性。
そして
先祖から受け継ぎ、子孫へ受け渡していく連続性。
さらに、自分は他の誰でもない、
唯一無二の存在であること。
私たち人間ばかりでなく、
生きとし生けるもの全てに
思いをはせてみる。
考えてみよう、
生命とは何なのかということ。



生命を考える
連続性

ずっとつながっていること



この生命は私のもの。
誰のものでもない、かけがえのない私の生命。
でも、どこからやってきたのだろう。

——そう

これは私が受け継いだもの。
ずっと遠い昔から受け継がれ
私が受け取ったもの。
この生命は私の生命だけれど
私だけのものではない。
私は生命というたすきを受け取り
人生というコースを
走りきらねばならぬ駅伝走者。
転んでも、立たなければならぬ。
くじけるわけにはいかない。
たすきを私に届けてくれた人たちのためにも、
そして私のたすきを
待っている人たちのためにも。

生命を考える
有限性

いつか終わりがあること



大切な人を亡くしたことがありますか。
自分の生命にも
いつか終わりがやってくる。
一度しかない
この生命の証を
自分はこの世に
どのように刻んでいけばよいのだろう。
もっともっと
生きていることを実感し、喜びたい。
そして、かけがえのない私の人生を、生命を
もっともっと輝かせていきたい。

生命の誕生と死



あんなに元気だった祖父が息もせず、静かに眠っている。いつもそばにいた大切な人が、もう二度と、笑顔を見せたり、私に話し掛けたりしないことがとても信じられない。たくさん人の涙、それは祖父がたくさん愛されていたからだと思う。誰かが「もっと一緒にいて、いろいろな話がしたかった。」と、言っていた。私は、身近な人の死に接して初めて生命のかけがえのなさを知った。



おばさんと、生まれたばかりの赤ちゃんが私の家に来てきた。赤ちゃんはにこにここと笑ってとてもかわいい。おばさんの話を聞くと、夜、泣き出すことも多いようで、赤ちゃんの世話は大変だと思った。赤ちゃんを抱いてみると、ずっしりと重くて、温かい。言葉にならない声を発したり、手足を動かしたり、もういろいろな感情があるようだ。生まれたばかりの頃は、私もこんなふうだったのかと、不思議な気持ちになった。

高く高い空を見上げ
果てしない宇宙を想像してみる
自分はなんと小さい存在なのだろう
しかし
ここに立つ私は「私」しかない
満天の星を仰ぎ
悠久の時の流れを感じる
自分はなんとはかない存在なのだろう
しかし
ここにいる私は「私」でしかない
果てしない宇宙にあっても
はるか永劫の時の中にあっても
この私は
ただ一つの存在、二つとない存在
一人一人のかけがえのない生命を
尊重し合って生きていきたい



(1) かけがえのない自他の生命を尊重して

● これまでの生活を振り返って、生命のかけがえのなさについて感じたことを書いてみよう。

かけがえのない生命

今、世界の人口は70億人を超えたと言われる。
 日本の人口は約1億3千万人となっている。
 日本だけでみると1年間に
 100万人以上が誕生し、亡くなっている。
 医療が発達した現代では、日本人の平均寿命は80歳を超えているが、
 一人一人の生命の長さは違う。
 私たちの世代でも、毎年、かけがえのない生命が失われている。

日本の出生数・死亡数

出生数 1,037,231人

死亡数 1,256,359人

厚生労働省「人口動態調査」(平成24年)

奇跡のように偶然が重なって自分に生命が与えられたことや、
 その生命にもいつか終わりがあることを考え、
 私たちは、どのように自他の生命を尊重していけばよいのだろう。



- 自分の生命、他人の生命、生きとし生けるものの生命の尊さについて考えたことをまとめよう。

科学技術の発達と生命倫理



科学技術や医療の急速な発達により、
 これまで難しかった診断や治療が可能になった。
 一方で、そういった実態と、人間としての在り方や生命倫理との関係について、
 様々な角度から議論が行われるようになった。
 こうした課題について、私たちは今後、どのように考えていけばよいだろう。



- 生命倫理に関する問題について、調べたり、話し合ったりしたことを書いてみよう。

saying

この人のひと言

人はいつか必ず死ぬということを
思い知らなければ、
生きているということを
実感することもできない。

ハイデッガー

■マルティン・ハイデッガー (1889~1976)
ドイツの哲学者。『存在と時間』『形而上学入門』など。

ひとの生命を愛せない者に、自分の生命を愛せるわけがない。

吉川英治

■よしかわ えいじ (1892~1962)
小説家。『宮本武蔵』『私本太平記』など。

人間が生きることには、常に、どんな状況でも、意味がある。

フランクフル

■ヴィクトル・フランクフル (1905~1997)
オーストリアの精神医学者、心理学者。『夜と霧』など。

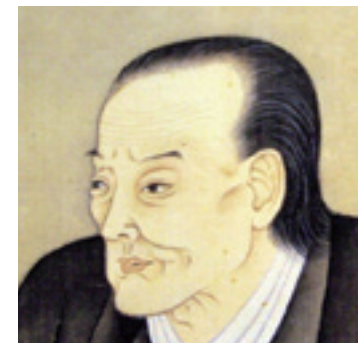
●あなたの見つけた言葉、考えたこと。

column

人物探訪

「人のために生きて自分のために生きないということが重要である。楽をせず、名声や利益を考えず、自分を捨てて人を救うのがよい。」
江戸時代の末期、まだまだ医学が未熟な時代、人命を救うことにすさまじいまでの使命を自己に課し、実践した人がいました。
その名は緒方洪庵。適塾の創設者であり、適塾は大村益次郎、福澤諭吉など幕末明治に活躍する偉人を輩出したことで知られています。医師洪庵の原点は、まさに人の命と向き合うことにありました。
天然痘の流行に、当時人々は恐怖に包まれていました。天然痘は、患ってしまったら死に至る、その難を逃れても重大な後遺症が残る恐ろしい病だったからです。

古来より天然痘に一度かかると治った者は一度と感染しないことが知られていました。このことから、天然痘にかかった人のうみを健康な人の体に接種して、
「このころ西洋医学を理解する人はまだ少数で、反対勢力からの誹謗中傷にも遭いました。そんな中、洪庵は時には米や菓子を与えることで接種する子供を募り、牛痘種痘の活動を続けて多くの命を救ったのです。」
洪庵は同志と協力して牛痘種痘をする施設として除痘館を設立し、その普及に尽力しました。
しかし、この方法では、時に重度の天然痘になってしまう恐れがありましたが、洪庵は、自分の幼い甥と姪らに人痘種痘を試みましたが、やはり良い結果は得られませんでした。洪庵はこれらを踏まえて危険性の高い人痘種痘を多くの子供たちに施すわけにはいかないと考えました。やがてイギリスで開発された安全性の高い牛痘種痘法の牛痘苗(ワクチン)が日本に渡ってきました。
洪庵は同志と協力して牛痘種痘をする施設として除痘館を設立し、その普及に尽力しました。



人の命を救い、
人々の苦しみを
和らげる以外に考えることは
何もない。
緒方洪庵

- 備中足守藩出身。蘭学者。1836年、長崎へ出て西洋医学を学び、大阪で「適々斎塾」(適塾)を開く。
- 輸入された牛痘種痘の痘苗を入手し、大阪に種痘所「除痘館」を開き、故郷の備中足守にも種痘所を開設した。
- 適塾では多くの門人が学び、近世から近代への時代の変化の中で、重要な役割を果たす人材を輩出した。



緒方洪庵(おがたこうあん) 1810~1863

大阪府中央区北浜に残る「適塾」

「こんにちは、キミばあちゃん。」

裕介ゆうすけたちの学校では学期に一回、近くの一人暮らしの老人を訪問している。キミばあちゃんは今年七十八歳さひ。長い間、大学で国文学を教えていたそうだ。大学の先生というと、気難しそうに思われがちだけど、とても気さくで話好きである。

「よう来てくれたね。美紀ちゃん、佐織ちゃん、順ちゃん。あれ、裕ちゃんはいないのかい。」

訪問も三年目になって、キミばあちゃんを訪問して元気付けるといっても、キミばあちゃんが裕介たちの相談相手になってくれている。

「裕介ね、また入院したんだ。しばらくかかるらしい。昨日寄ってみたんだけど、あいつあんまりしゃべらなくて、黙だまっているのも気詰まりで、せっかく行ったけど、すぐに病室を出てしまったんだ。……どうしたらいいのかなあ。」

順平じゅんぺいが助けを求めるようにキミばあちゃんの方を見た。キミばあちゃんもすぐに順平の気持ちを察したようだ。

「難しいなあ、順ちゃん。でも心配している順ちゃんの気持ちは裕ちゃんにも分かるよ。」

それから四か月がたち、最後の訪問日となって、四人はそろってキミばあちゃんの家に行った。

キミばあちゃんは、みんなの顔を見るなり、すぐに裕介に調子はどうかと尋ねた。

「ここんとはまあまあなんですけど。すぐに具合悪くなっちゃうんで……。」

と、裕介は寂さびしそうに答えた。

「裕ちゃん、一人で悩なやむと落ち込こむよ。裕ちゃんには心配してくれる友達もいるんだからね。」

と、キミばあちゃんは、裕介の背中をポンとたたいた。美紀も佐織もそうだとさう言うようにうなずいた。

「うん。元気になれるっていつも自分に言い聞かせているんだけど。時々ね、……苦しくなるんだ。」

「苦しくなるって。」

「ずっと一生こんなふうに病院を出たり入ったりするのかな、と思うと……。」

キミばあちゃんは、裕介の肩かたに手を置いて座らせ、優しい目で次の言葉を促うながした。

「親にも心配あせわや迷惑めいわくばかりかけて心苦しいし、何のために生きてるのかな、生きていても仕方がないのじゃないかと思ったりすることもあるんです。」

いつもは感情をあまり表に出さない裕介の声が、震ふるえているのに気付いた順平は、驚おどろいて裕介のそばに寄った。

「そうかい。」

キミばあちゃんは穏おだやかに言うと、立ち上がった。

隣の部屋とまりから何冊かの本を手に戻もどつてくると、一冊を開いて裕介の前に置いた。そのページには、しおりが挟はさんであった。

「裕ちゃん、この本には、『＊広瀬淡窓』という人のことが書いてある。七十五歳まで生きたんだけれども、とても病弱だった人なんだよ。その淡窓が二十三歳のときに倉重湊くらしげみねという医師に宛あてた手紙と、その後のいきさつが書いてあるから読んでごらん。」

裕介は本を手に取った。

広瀬淡窓
江戸時代の儒学者、漢詩人、教育者。私塾「咸宜園かんぜん」を創設。身分などを問わない教育を行った。

「生来、多病の私ですが、今最も憂えているのは、何を目標に生きていけばよいかということ。幼いときから勉強に励んできたことを生かして身を立てる以外に思わないように思うのです。そうするならば、どこかの藩に仕官するか、都へ出て自分で塾を開くかだと思っております。しかし、病気がちの私には務まりません。この日田で教師となることも考えましたが、この地で儒者として成功した人はいません。私も数年来、生徒を集めて教えていますが、とても生計を立てられるほどには人はいりません。医師になることも考えたのですが、長い修行も必要ですし、だからといって農工商売もたやすいことはありません。どうすればよいのか悩んでいます。どうぞ解決の良い方法を教えてください。」

仕官する
役人になること。武士が
大名などに仕えること。
儒者
儒教を学ぶ者、また教える者。

ところがなかなか返事が来ないので、待ちきれなくて淡窓は倉重に会いに出掛けて行った。

「確かに手紙は読んだ。趣旨はともかく、同じことをくどくど繰り返して、愚痴や恨み言ばかり並べて見苦しい。君の行くべき道はただ一つしかなく迷いようがないではないか。君の得意な分野で生きていくことだ。教師では食えないと言うが、それはまだ真剣に教えていないからだ。私の見るところでは、まだ工夫や努力が足りない。不健康を理由に、だからだらしな生活を送るならば、父母への最大の不孝だ。迷うことなく、ただ一筋に教師の道を進むべきである。」

倉重のこの言葉で、淡窓はこれまでの判断しかねていた気持ちを吹っ切って塾に専念することにした。

裕介は、ここまで読んで顔を上げた。キミばあちゃんが湯飲みを両手に包み込むように持ってこちらを向いている。順平は少し心配そうな顔付きで見ている。裕介は、広瀬淡窓はこの後どうしたのだろうという思いが湧き上がってきた。そして病気はどうなったんだろうという思いも消えなかった。

「淡窓は、江戸時代に今の大分県の日田に『咸宜園』という塾を開いたんだよ。『咸宜』というのは『み

なよろし』という意味だね。身分に関わらず、みんな勉強しに来なさいということなんだ。日本中から塾生が集まってきたんだよ。

淡窓の病弱は治ったわけではない。いつも体中のあちこちに痛みがあって、そのために何か月も寝込んだんだよ。なかなか辛抱できないような痛みも耐えて、懸命に頑張ったんだ。まあ、言ってみれば、病気をすればするほど少々の困難にはびくともしない精神的な強さを身に付けたんだらうね。自分だけが何でという思いもあったとは思うけど。それを何かのせいにせず、前へ進もうとしたのが広瀬淡窓なんだよ。

あれあれ、ちよっとお説教臭くなったかねえ。それなら、一つ面白いものを見せよう。淡窓のチャレンジだよ。」

キミばあちゃんは、黒と白の丸がずらっと並んだコピー用紙をみんなに配った。右上に万善簿と書いてある。

「まんぜんぼ。」

四人が一斉に声を上げた。

「そう、『万善簿』と言ってね。淡窓が、今日から一万



咸宜園

個の良いことをしようと付けた帳面なんだ。良いことをしたときは白丸。悪いことをしたときは黒丸。例えば、生き物を大事にしたというときは白丸。体に悪いことをしたときは黒丸。毎日帳面に付けて、白丸と黒丸を計算して、今日は白丸がいくつ残ったというように付けるんだ。私が一番好きなのは、黒丸が十個も書いているところ。何をこんなに悪いことをしたのかと思ってみると、『権藤生 死す』とある。権藤さんという塾生が亡くなったんだね。そして、『介抱不行き届き』と書いてあるんだよ。自分の所に来ていた塾生が死んだからといって、これだけの黒丸を連ねているんだよ。気になって、帳面の少し前を見ると、今日は権藤生を見舞った。白丸一つ。今日は権藤生を見舞うつもりだったが行けなかった。黒丸一つと書いてあるんだよ。自分が病人なのにね。それでも、権藤さんが亡くなったときには、黒丸をいくつも連ねずにはいられなかったんだね。人柄が分かるね。」

15

「すごい人がいたんだね。とっても僕は広瀬淡窓とかいう人のようになれないだろうけど……。甘かったんだね。キミばあちゃん、ありがとう。」

裕介は、キミばあちゃんの手を取ってぐっと握り締めた。

20

「裕介、僕らも万善簿、いや、百善簿くらいやってみるか。」

美紀と佐織は、私たちもやってみようと言い出した。そして、庭を指差した。「庭の椿がきれいだね。美しいものと思う、この気持ちに白丸一個。」と、すまして言うと、キミばあちゃんは、窓を開けた。

「きれいだろう。あの椿。あれはね、冬の寒い中でもきれいな花を咲かせる。そして、椿は最後の最後まで生ききる。だから私は好きなんだよ。あんなふうに生きたいと思っているよ。そうそう五所平之助さんという人が詠んでいる句があつてね。『生きることは一と筋がよし寒椿』、いいねえ。」

5

● 感じたこと、考えたこと。



五所平之助
昭和の映画監督、俳人。



万善簿